

## 視覚的コミュニケーション・スキルの発達により強度行動障害から脱した自閉症スペクトラム障害の1成人例

— 絵カード交換式コミュニケーション・システム(PECS)による取り組み —

門 眞 一 郎 (京都市児童福祉センター児童心療科)

村 松 陽 子 (よこはま発達クリニック)

幸 田 有 史 (京都市児童福祉センター児童心療科)

長 倉 い の り (京都府立洛南病院)

田 中 浩 一 郎 (京都市児童福祉センター児童心療科)

田 中 一 史 (京都市児童福祉センター児童心療科)

上 鹿 渡 和 宏 (京都市児童福祉センター児童心療科)

A Case of a Young Adult with Autism Spectrum Disorders Who Has Released from Severe Behavior Problems through Visually Supported Communication Training: The Usefulness of the Picture Exchange Communication System (PECS)

Shinichiro KADO (*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*)

Yoko MURAMATSU (*Yokohama Psycho-Developmental Clinic*)

Aritumi YUKITA (*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*)

Inori NAGAKURA (*Kyoto Prefectural Rakunan Hospital*)

Koichiro TANAKA (*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*)

Kazushi TANAKA (*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*)

Kazuhiro KAMIKADO (*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*)

■要旨：ノーマライゼーションの理念が普及し、施設入所型のサービスから地域生活支援型のそれへと、障害者福祉は大きく方向転換しつつある。しかし、知的障害者入所施設の需要は決して減少していない。とくに強度行動障害と呼ばれる人たちの全入所者に占める割合はむしろ上昇しつつある。また、施設内処遇の不十分さから強度行動障害を誘発している可能性も看過し得ない。本稿では、自閉症スペクトラムの1成人の対応困難な行動に対する取り組みを紹介する。本事例の対応困難な行動は、コミュニケーション障害に起因しており、自発的コミュニケーション・スキルの習得がその解決に有効であろうと考えた。そこで、視覚的な理解のほう聴覚的なそれよりも多少なりとも優れるという検査結果から、視覚的な手段を用いたコミュニケーション・トレーニングが有効と考え、絵カード交換式コミュニケーション・システム(PECS)を導入し、良好な結果を得たので報告する。

■キーワード：自閉症スペクトラム、強度行動障害、コミュニケーション、絵カード交換式コミュニケーション・システム(PECS)

### I. はじめに

#### — 自閉症スペクトラムと強度行動障害 —

自閉症スペクトラム(以下、ASDと略す)の人たちのある種の行動に周囲の人たちが困惑する場合、たとえそれが周囲の人たちの対応の不適切さに起因する場合であっても、ASDの人自身の問題である

かのごとき名称で呼ばれることが少なくない。たとえば、問題行動、行動障害、強度行動障害、不適切行動などである。

その種の行動としては、自傷行為、攻撃的行動、痙攣発作(俗にいうパニック)、固執的強迫的行動(いわゆるこだわり)などがある。そしてその程度や頻度がきわめて著しい状態を、「強度行動障害」と呼ぶこともある(厚生省, 1998)。

この種の問題の解決にあたっては、まずそれがどういう意味、すなわち機能をもっているのかを検討しなければならない。機能分析によると、ASDの人の対応困難な行動はコミュニケーション障害に起因していることがとても多い(Durand, 1988, 1990; Durand & Crimmins, 1988; Hodgdon, 1995, 1999; Wing, 1996)。その場合、当然のことながらコミュニケーション・スキルの発達とコミュニケーションが成立しやすい環境の整備が、問題解決の最良かつ最強の対策となる。

ASDの人の多くが最も苦手とするのは、音声言語をコミュニケーションの手段にすることであり、必要としているのは視覚的なコミュニケーション手段である。したがって、コミュニケーション障害から生じる対応困難な行動の解決のためには、音声言語(verbal)ではなく、非音声言語による(non-verbal)コミュニケーション・スキルの獲得が最良の方法ということになる(Hodgdon, 1995)。非音声言語的コミュニケーション・スキルを伸ばすための方法にはいくつかあるが、最近欧米で急速に普及しつつある方法に、絵カード交換式コミュニケーション・システム(Picture Exchange Communication System)、略称PECS(ペクス)というプログラムがある(Bondy & Frost, 1995, 2001)。このたびASDの1成人が、PECSを使うことで強度行動障害の状態から脱することができ、また生活の質(QOL)が向上するに至ったので、その取り組みについて以下に報告する。

## II. 事例

Kさんは、23歳の男性である。小学校時代から現在まで、知的障害児施設に入所中である(現在も児童相談所による措置延長が続いている)。

### 1. 生育歴など

在胎38週、帝王切開にて出生。生下時体重は4380gで、黄疸が強かったために光線療法を受けた。Kさんが4歳のとき、両親が離婚し、以後Kさんは母親に育てられた。現在までの特記事項を児童相談所の児童記録から抜き出すと以下ようになる。

- 1歳10か月時、「ことばと歩行の遅れ」を主訴として児童相談所に相談した。
- 初語は「まんま」が1歳10か月ごろとの記録がある一方、4歳10か月時の心理判定書には「有意味語なし、喃語発声のみ」とある。歩行は1歳10か

月。幼児期は多動であった。

- 2歳7か月時の心理判定書には「中度精神発達遅滞」とある。
- 2歳10か月時に、知的障害児通園施設への単独通所を始めた。
- 4歳10か月時の心理判定書には、「新K式発達検査で、発達指数(DQ)は24、重度精神発達遅滞、てんかん」とあり、記録には、母の陳述として「自閉症ではなく、知恵遅れといわれた」とある。
- 6歳8か月に知的障害養護学校小学部に入学したが、その後、母や祖母の病気や妹の入試、卒業、入学などの折に、たびたび知的障害児入所施設に緊急一時保護された。
- 8歳0か月時の心理判定書には、「DQ 15、最重度精神発達遅滞、てんかん(レノックス症候群)」とある。
- 11歳8か月時の心理判定書には、「DQ 13、エレベーターへの興味こだわりが強い。テレビは囲碁や教育テレビ、雑誌はグラビア。アルファベットのA, B, Cは区別できる。今年になって欲しい食べ物を指差すようになった」とある。
- 11歳11か月(小学部6年)時に知的障害児入所施設に措置され、現在まで入所が続いている。すでに成人年齢に達しているが、成人施設への移行が適わず、引き続き児童相談所から措置延長されている。
- 入所希望理由は「登下校時における送迎が困難(スクールバスの停留所まで連れて行けない)。道中、店の自動ドアなどに固執し、規制ができない。多動である」というものであった。入所当時の状態は、「現在登校ができていないためリズムが狂い、家にいるとストレスがたまる。自閉的傾向があり、物へのこだわりが強い。特に、エレベーター、自動ドアがあると、制限や指示が入らなくなる。多動である」と記録されている。
- 18歳時に養護学校高等部を卒業した(体重57kg)。以後、施設中心の生活となった。居室は2人部屋であった。対応困難なこととしては、畳や扉を投げようとする、ベンチを倒す、ある入所者の歩行具を倒そうとするなどがあり、体重増加とともに危険度が増してきた。
- 22歳時に、「新K式発達検査で、総合的な発達年齢は1歳10か月、発達指数は11。最重度精神発達遅滞」と判定された。しかし、課題により成績は変異し、音声言語中心の課題では発達レベルが0歳11か月であったのに対し、視覚的手がかりのあ

る課題では2歳0か月であったので、聴覚的理解よりも視覚的な理解のほうがよい傾向にあった。

●PECSを実施する前の状態は、強度行動障害の状態であった。

## 2. 施設での生活

日課は単純なもので、食事と入浴以外には、毎日グループ活動と余暇活動という時間があるだけである。グループ活動といっても、Kさんは、暖かい季節はほとんど水遊びに耽っている。寒い季節には、ワープロで少し遊ぶくらいである。居室でひとり余暇活動に耽ることも頻繁になった。その内容は、居室で常に映し出されているビデオを見るくらいのことである。そして、合間に飲食物の要求が頻繁に出してくる。

Kさんは行動障害の激しい人たちの居住棟で生活していたが、とりわけ行動が激しく、以前からイライラしたときにベンチを倒す、物をやたら投げる(畳など)、攻撃的な行動をとるなどの対応困難な行動が著しいために、最も奥の個室に居室を移された。

好きなビデオを独占的に見るができるよう、個室の壁にはビデオ画面がはめ込まれたため(スイッチは詰所で遠隔操作)、著しくビデオ依存の生活になっていった。体重は77kgに増加した。一部の職員(食べ物、ドライブ等の欲求を先回りしてかなえてくれる人)に強く依存するようにもなった。

しかしKさんの場合、この生活空間の移動により、かえってマイナス面が多く出てきた。すなわち、①問題行動(叩く、人に向かう)の増悪、②攻撃の対象者が一人に集中(同じ行動障害区域のASDの人)、③一部の職員への後追い、④ビデオへの執着(常にビデオが映っていないと、そして映っていても思い通りの映像でないと不穏になる)、⑤体重の増加(興奮を鎮めるために菓子類を与えることが増えたため)などである。

## 3. 投薬内容(施設の嘱託精神科医よりの処方)

### 1 日量(分2)

カルバマゼピン 400 mg, バルプロ酸ナトリウム R 1000 mg

### 就寝前

ハロペリドール 0.75 mg, プロチゾラム 0.25 mg

## Ⅲ. Kさんの対応困難な行動とそれへの対応

### 1. 攻撃的な行動

#### 1) 攻撃的行動の機能

Durand(1990)は、対応困難な行動を比喩的にコミュニケーション行動と見て、その機能を、①他者からの注目の要求、②具体的な結果の要求、③拒否や回避、④感覚刺激の要求の4種にまとめている。

Kさんの対応困難な行動について、Durand(1990)に従ってその機能を考えると次のようになる。①に関しては、好きな職員が本人のほうを向いていなかったり、何も対応してくれなかったりすると、対応困難な行動が出ることがある。②に関しては、ほしい物が手に入らないときにも対応困難な行動が出るようだが、ほしい物が手に入っても対応困難な行動が出ることがある。しかしKさんにとって、魅力的なものを職員が渡してなだめるという対応はよく行われているので、今後この機能が明瞭になる可能性はある。③に関しては、嫌な出来事や活動に抗議したいときや、自分の思い通りにならないときに、対応困難な行動が出る。これが最も多い。④に関しては、水の感触を求めて水遊びがやめられないことが該当する。

#### 2) これまでの職員の対応

叱る、制止する、なだめる(食べ物を使う)ことしかしていない。むしろそれをKさんは期待しているのではないかと感じる時もあり、その場合は①の他者からの注目という強化子を与えてしまうことにもなり、かえって対応困難な行動を強化してきたことになる。

### 2. 限局的な興味や固執的な行動

ASD特有のいわゆるこだわりで、日ごろ対応が困難なものもいくつかある。おもなものを挙げると、

#### 1) エレベーター

エレベーターを見つけると突進し、そこから離れない。連れ戻すには複数の職員が力づくでする以外に方法がないといわれてきたため、長い間エレベーターがありそうな場所への外出は行われていない。長年月にわたって外出先が制限されており、QOLはその分低いものになっている。

#### 2) 水遊び

直径1メートルくらいのたらいのふちに腰かけ、水道栓を全開にして注水し続け、たらいからあふれ

出る水の感触を楽しむ。いったんこの遊びが始まると、切り上げさせることがきわめて難しい。冬でもたらいを見つけると遊びはじめ、鼻水を出し震えながらも遊んでいることがある。水洗トイレに衣服を詰めて、レバーを引き、水をあふれさせて遊ぶこともある。止めると頑強に拒否する。そのままほっておくと、明らかに眠そうなのに朝の7時まで夜通し続けたことがあった。

### 3. 対応策

Kさんは、普段からコミュニケーションが不得手で、要求を適切な形で職員に伝達できず、そのために欲求不満におちいり、対応困難な行動が結果することが多いのではないかと仮説を立てた。したがって、欲求不満を軽減するためには、自発的コミュニケーションのスキルを伸ばす必要があり、スキルが伸びれば対応困難な行動は軽減するか解消するに違いないと考えた。そのためには、PECSによるトレーニングが最適だと考えて実施した。

## IV PECSの導入

### 1. PECSとは

PECSは、絵カード(写真や実物を使ってもよい)を手渡すことで、その絵カードが示す物や活動を手に入れたり、説明をしたりする方法である(Bondy & Frost, 2001; Frost & Bondy, 2002)。

絵カードや写真を使う代替コミュニケーション指導はこれまでも行われてきたが(Reichle et al., 1991)、PECSと従来のやり方との重要な違いは、トレーニングの最初から自発的コミュニケーションと他者とのやりとり(交換)を重視するという点である。他者(職員や家族など)からのプロンプトに頼る(=応答的)コミュニケーションではなく、ASDの人のほうから始める(=自発的)機能的なコミュニケーションを教えるものである。PECSのトレーニングは6つのフェイズ(段階)に分けられる。(表1)

### 2. PECS と他の視覚的支援の組み合わせ

PECSだけでASDの人への支援がすべてまかなえるわけではない。あくまで自発的コミュニケーション・スキルが発達し、ASDの人と周囲の人たちとの

表1 PECSの6つのフェイズ (Magiati & Howlin (2003) の表を一部修正)

フェイズ	目標	内容
準備	好子*アセスメント, 絵カード作成	子どもを観察し、よくほしがる物、玩具、食べ物、活動のリストを作成; 毎回トレーニングの開始前に再アセスメント
I	絵カードで要求する	トレーナーは2人必要; 絵カードを1枚だけ机に置く; 子どもは通常要求対象に手を伸ばす; プロンプターは絵カードと交換するようプロンプトする; パートナーは要求物を与える; 言葉ではプロンプトしない; 自力で交換できるようになるまで身体的プロンプトを徐々に最後のほうから控えていく
II	移動し自発性を高める; 離れた位置から絵カードを交換しにきて要求する(人を変え, 場所も変えて)	子ども・絵カード・おとなとの間の距離を開けていく; 人と場面をいろいろ変えて般化させる; まだ絵カードは1枚だけ使う。絵の弁別はできなくてよい
III	要求に使う絵カードの弁別	絵カードの数を徐々に増やす; 子どもは適切なシンボルを選び交換する
IV	「…ください」という文で要求する	文章カードを用いて文を構成する; 「ください」カードの前に要求対象の絵カードを加える
V	「何がほしい?」に要求で答える	特定の言葉によるプロンプトや質問に答えることを教える
VI	質問に応答的なコメントをする; 自発的なコメントをする	「何を持っている? 何が見える? 何が聞こえる?」に、適切なシンボル(見える, 持っている, 聞こえる)を使って答える; 対象物の名称を言う; これらの質問と「何がほしい?」とを弁別する; 自発的にコメントする
追加トレーニング	新たな抽象的言語概念を教える	数, 色, 動詞概念, 属性, 位置など; 「はい/いいえ」

\*好子は強化子ともいう(どちらも reinforcer の訳語)。ここでは子どもが自発的に要求してくれるアイテムである。

間のコミュニケーションが成立しやすくなるだけである。ASDの人への包括的な支援を目指すなら、他のスキルについても支援をしていかなければならない。PECSを用いる場合も他の重要なスキルを教えるが、ここでは省略する。

## V. PECSの実施

### 1) トレーニング環境

月曜から金曜(祝日除く)まで週に5日間、9時半～10時、13時半～14時に、生活棟より100m離れている作業棟で行った。

### 2) フェイズI(実施日:2月12日)

30試行目あたりから、カードを自力で手渡せるようになった。トレーナーが代わってもカードを手渡せるようになり、初日でフェイズIは達成した。

### 3) フェイズII(期間:2月13日～2月27日)

Kさんと写真カードとの距離を伸ばしていっても(50～300cm)、カードを持って手渡しに行くことができた。カードを受け取る手を開くキューやプロンプトは初めの9試行は必要だったが、最後の5試行では必要なかった。

トレーナーが何も持っていないくても、写真カードを手渡せた。トレーナーがほかの人とおしゃべりしている状況を作ったが、カードを手渡しに来ることができた。初めてトレーニングの様子を見に来た看護師にも、写真カードを渡してポップコーンを要求した。

お菓子を食べながら、自発的に(オウム返しではなく)「おいしい」とはっきりと言った。トレーナーが動いていても、追いかけて確実に手の中にカードを入れることができた。

### 4) フェイズIII(2月28日以後)

フェイズIIIではカードの区別についてのトレーニングをすることになっている。しかしKさんの場合は、長年の生活経験から、すでにほしい物の写真を指差すことで確実に要求できるようになっており、写真の区別はかなりできるものと考えられた。生活の中でカードによるコミュニケーションができるようにすべく、Kさんが普段よく要求するもの12種類の写真カードを詰所の表側にコミュニケーション・ボードを設置し、1日24時間カードを使用できるようにした。

## VI. PECSと連動させた他の取り組み

### 1. スケジュールの導入(時間の視覚的構造化)

コミュニケーションの理解面への支援として、PECSの日常生活への導入とはほぼ同じころから、視覚的スケジュールを導入した(これはPECSでは通常フェイズIIIの終わりから併用される)。

最初の段階は、次の活動をひとつだけ絵カードで示すことから始めた(例:食事の前に「ごはん」の絵カード、入浴の前に「お風呂」の絵カードを呈示)。PECSトレーニングの成果のひとつとして、絵や写真のカードには意味(情報)があるということがわかったため、カードにはよく注目し、呈示回数を重ねるうちにカードと実際の活動とが一致するようになった。

次の段階で、一気に1日単位でのスケジュール表示を始めた。朝食から寝るまでの14～15の活動を同時に呈示した。いきなり1日のスケジュールでは飛躍しすぎではないかと心配はしたが、次の2～3の活動をそのつど呈示していくことのほうが、かえって職員間での方針徹底が困難であろうと判断した。また、Kさんの生活は良くも悪くも単純であり、Kさんの想像や経験を超えるようなイベントを急にスケジュールに入れることは少ないと判断し、1日のスケジュール呈示を始めた。

### 2. 回数制限つき要求カード

PECSの絵(写真)カードは、音声言語と等価なものなので、いつでも何度でも使えるものでなければならない。カードを撤去することは、口を塞ぐことに等しいことになる。しかし、要求に無制限に応じることが、通常の生活ではあり得ない。要求実現を待つことや、要求実現の時をスケジュールに明示すること、〈休憩〉の要求は回数制限することが、PECSでは付加的なスキルとしてトレーニングの課題になっている(Frost & Bondy, 2002)。

〈休憩〉要求の回数制限カードと同様の発想で、Kさんの特定の要求に一定の制限を視覚的に設ける試みを始めた。

回数制限つき要求カードは、ポップコーン要求用には、同一のポップコーンの写真カードを15枚作成した(食事と食事の間に15回分、1日計45回)。15枚のカードがなくなれば、ポップコーンは終わりとした。

### 3. 水遊びの視覚的構造化

Kさんは毎年5月から9月半ばまで水遊びを楽しむ。水道栓全開で水を出しっぱなしのホースとともに大きなたらいの中に入り、そのたらいの縁からあふれ出る水を眺め、またその感触を楽しむ。

水遊びについての対応上の問題点は、①終わりをわかりやすく伝えていないため、Kさんは納得して終われない、②いつ、どれだけ水遊びができるのかを伝えていないので遮二無二要求してくる、の2つである。

①については、まずたらいの写真カードを8枚用意し、カード1枚につき活動時間は15分と決めた。活動最長時間を2時間とし、水遊び用コミュニケーション・ボードにたらいの写真カードを8枚貼っておく。Kさんは、水遊びに来たらPECSと同じ要領でたらいの写真カードを1枚職員に渡す。渡された職員は循環式ポンプのスイッチを入れ、キッチン・タイマーを15分にセットする。タイマーが鳴ったら水を止める。次にKさんから2枚目のカードを受け取ると、再び水を流し、タイマーをセットする。この繰り返しでコミュニケーション・ボードにカードがなくなれば、その回の水遊びは終了とした。コミュニケーション・ボードには次の活動のカードが貼ってあり、Kさんはそれを持って棟へ戻る。

導入後、2～3回でシステムを理解し、最後のカードが終わると納得して次の活動カードを持って帰ることができるようになった。その後、たらいのカードがまだ残っていても次の活動カードを手にして帰ったり、次の活動カードを職員のところに持ってきて、「棟に帰りたい」ことを伝えたりすることもできるようになった。

②については、1日のスケジュールを視覚的に表示することを始め、「何時から」「どの職員と」水遊びができるのかを、絵や写真カードで表示した。スケジュールの横に時計も置き、本人が時間前に要求してきたときには時計を見せて、「まだ早いよ」などと対応することにした。時計の針の角度を見て、Kさんなりに時間を理解している様子がみられた。Kさんのとても好きな活動である水遊びが始まると、スケジュールへの注目度はますます高くなっていった。

## Ⅶ. 取り組みの結果

### 1. Kさんの変化

周囲に誰もいないときは、写真カードを手渡す相

手を探すようになった。施設内という限定的な環境ではあるが、写真や絵カードによる自発的なコミュニケーションが安定して行えるようになった。

視覚的スケジュールにより生活に見通しが立つようになり、日常的に落ち着いてきた。

スケジュールと好子(強化子)の適切な配置により、嫌いな散髪にも暴れることなく取り組めるようになった。

路線バスに乗っての外出ができた(2回、バスと目的地の写真カードを使った)。これまで貸切バスの経験しかなかったが、バス停で待つことができた。バスが来るととてもうれしそうにしていた。

水遊び写真カード1枚につき15分間の水遊びと交換することで、水遊びの時間を保障することができ、結果的に水遊びを大幅に減らすことができた。

要するに、PECSやスケジュールを使った視覚的支援により、強度行動障害の状態から脱出することができた。

### 2. 職員の变化

PECSトレーニングを開始してわずか2、3か月後には、Kさんはずいぶんと落ち着き、笑顔も出るようになった。そういうKさんの変化を目の当たりにして、コミュニケーションが改善されることが一人の人をかくも生きやすくするものなのかと認識を新たにした職員も少なくない。

また、これまではKさんが暴れる理由がよくわからなかったが、理由を特定できるようになり、その分、職員も落ち着いてかかわれるようになった。スケジュールを目に見える形で表示したことで、職員がKさんの強い要求に屈することなく、一貫した対応をするようになった。

スケジュールがないとKさんに情報が伝わったかどうかはわからず、職員のほうがかえって不安になるので、むしろ両者が積極的にスケジュールを生活の基本にすえるようになった。

## Ⅷ. 考 察

### 1. PECS導入によるコミュニケーションの変化について

Kさんの自発的コミュニケーション・スキルを向上させ、職員との間のコミュニケーションを確実明確なものにするために、PECSによるトレーニングを導入した。その結果、1～2か月でフェイズⅢレベルまで進み、その結果Kさんの生活は一変した。

コミュニケーション・ボードで確実に自分の意思(おもに要求)が伝わることを、スケジュールで確実にこれからの見通しが立つようになったことで、Kさんはとても落ち着いて行動できるようになり、表情や態度もずいぶんと穏やかなものになった。

さらに、水遊びの構造化により水道代の劇的な節約も達成でき、外出先が著しく制約される原因になっているエレベーターへの固執に対しても解決の曙光が差しはじめた。

ところで、Kさん以外にも、ASDや重度精神遅滞のためにコミュニケーションに著しい制約を受けている人の中には、PECSトレーニングを受けることによって自発的コミュニケーション・スキルを向上させ、その結果QOLを格段に向上させることができる人がもっといるはずである。そうなれば施設内の様子は一変するはずである。それは決して難しいことではなく、職員全員が共通の目標(=ASDの人と職員とのコミュニケーションの改善)に向かって、合理的で一貫性のあるかわりをしさえすれば、簡単に実現できることである。

PECSを適用するまでのKさんは、旧厚生省(1998)による判定基準によると13点となり、10点を超えるので強度行動障害の状態であった。強度行動障害に代表される対応困難な行動は、ASDの人が攻撃的な意図を一方向的に抱いて引き起こすものではなく、周囲の人とのコミュニケーションがうまく成立しないため、あるいは不適切な成立の仕方になっているためであることがとても多い。ASDや重度精神遅滞の人の対応困難な行動に対処するには、その行動がコミュニケーション上どういう意味をもっているのか、言い換えればどういう機能を果たしているのかをまず理解しなければならない。その種の行動が果たしている機能がわかれば、その機能を担える別のコミュニケーション・スキルを使えるようにすることで、現に生じている問題を解決できるし、以後の予防も可能となるからである(Durand & Crimmins, 1991; Hodgdon, 1999; Reichle et al., 1991)。

## 2. スケジュール使用によるコミュニケーションの変化について

スケジュール、特に「いつ?」ということと「職員は誰?」ということを視覚的に提示したことで、職員はKさんの強い要求に屈することなく対応できるようになったことも、大きな成果である。これまでなら暴れるからという理由で結局Kさんの好きな活動をさせていたが、最近ではどの職員も、Kさん

がいくら暴れようが泣き喚こうが、時間までは待たせるようになってきた。じきにKさんもスケジュールの意味が理解できるようになった。PECSはコミュニケーションの表出面での支援であるが、スケジュールは時間の構造明確化であり、コミュニケーションの理解面での支援である。

## 3. 要求の制限について

ポップコーンの要求に対して、決まった枚数の同じカード(ポップコーンの写真)をコミュニケーション・ボードに掲示し、写真カードがある限り、それと交換にポップコーンがいつでももらえるようにしたことで、特定のものの要求には限度があることを伝え、Kさんはそれを理解した。このシステムをひとたび理解したら、同じように水遊びについても回数制限があることは比較的容易に理解することができた。

この一連の取り組みを始めるまでは、本人の要求があったときに水遊びを始め、いつもKさんを無理やり引きずって居住棟につれ帰ることで終わりにしていた。要求がかなえられないとき、Kさんは暴れ、暴れると仕方なく水遊びに連れて行かざるを得ないという悪循環が続いていた。Kさんにとって水遊びの要求を伝える方法は「暴れる」ことしかなかったのである。しかしそれでは、職員がKさんに「暴れたら水遊びさせてあげるよ」というメッセージを伝えてしまっていたことになる。Kさんにはわかりにくい見通しの立たない生活であったが、PECSにより、水遊びまでもがわかりやすい形に整理され、納得して遊べるようになった。

## IX. おわりに

本稿では、強度行動障害の状態にあったASDの成人に、PECSによってコミュニケーション表出面の改善を図り、同時に視覚的構造化によってコミュニケーション理解面の改善を図った経過を報告した。そしてその結果、強度行動障害の域に達していたKさんの対応困難な行動は著しく軽減し、KさんのQOLもそれに伴って改善したことも述べた。しかもごく短期間のうちにこの改善がみられた。

ASDの人の対応困難な行動の解決ばかりでなく、その予防のためにも、視覚的支援をはじめとしてコミュニケーション障害に対する適切な支援方法の導入が望まれる。

謝 辞

本事例の投稿に関しては、保護者から書面で承諾をいただきました。本事例へのPECSによる視覚的支援については、京都市醍醐和光寮職員(当時)の皆様の、とりわけ津田要、岩井千尋、岡田雄二郎さんのご協力に深く感謝します。

文 献

- Bondy, A. and Frost, L. (1995) Educational approaches in preschool: Behavior techniques in a public school setting. (eds.) Schopler, E. and Mesibov, G.B., *Learning and Cognition in Autism*. Plenum Press, 311-333.
- Bondy, A. and Frost, L. (2001) The picture exchange communication system. *Behavior Modification*, 25, 725-744. (門真一郎訳 (2004) 絵カード交換式コミュニケーション・システム. 高木隆郎, ハウリン, パトリシア・フォンボン, エリック編, 自閉症と発達障害研究の進歩第8巻. 星和書店, 82-94.)
- Bondy, A. and Frost, L. (2002) *A Picture's Worth: PECS and Other Visual Communication Strategies in Autism*. (園山繁樹・竹内康二訳 (2006) 自閉症児と絵カードでコミュニケーション—PECSとAAC—. 二瓶社.)
- Durand, V.M. (1988) The Motivation Assessment Scale. (eds.) Hersen, M. and Bellack, A., *Dictionary of Behavioral Assessment Techniques*. Pergamon Press, 309-310.
- Durand, V.M. (1990) *Severe Behavior Problems: A Functional Communication Training Approach*. Guilford Press.
- Durand, V.M. and Crimmins, D.B. (1988) Identifying the variables maintaining self-injurious behavior. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 18, 99-117.
- Durand, V.M. and Crimmins, D. (1991) Teaching functionally equivalent responses as an intervention for challenging behavior. (ed.) Remington, B., *The Challenge of Severe Mental Handicap: A Behavior Analytic Approach*. John Wiley & Sons. (『問題行動』への介入としての機能的に等価な反応の形成. ポブ・レミントン編・小林重雄監訳 (1999) 重度知的障害への挑戦. 二瓶社, 69-91.)
- Frost, L. and Bondy, A. (2002) *The Picture Exchange Communication System: Training Manual*, 2nd ed. Pyramid Educational Products. (門真一郎監訳 (2005) 絵カード交換式コミュニケーション・システム—トレーニング・マニュアル第2版—. NPO 法人それいゆ.)
- Hodgdon, L.A. (1995) *Visual Strategies for Improving Communication: Practical Supports for School and Home*. QuarkRoberts Publishing.
- Hodgdon, L.A. (1999) *Solving Behavior Problems in Autism: Improving Communication with Visual Strategies*. QuarkRoberts Publishing.
- 厚生省大臣官房障害保健福祉部障害福祉課 (1998) 強度行動障害特別処遇加算費の取扱いについて.
- Magiati, I. and Howlin, P. (2003) A pilot evaluation study of the Picture Exchange Communication System (PECS) for children with autistic spectrum disorders. *Autism*, 7, 297-320.
- Reichle, J., Sigafos, J., and Remington, B. (1991) Beginning an augmentative communication system with individuals who have severe disabilities. (ed.) Remington, B., *The Challenge of Severe Mental Handicap: A Behavior Analytic Approach*. John Wiley & Sons, 189-213. (重度障害者のための補助的コミュニケーションシステムへの着手. 小林重雄監訳 (1999) 重度知的障害への挑戦. 二瓶社, 181-207.)
- Wing, L. (1996) *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. Constable. (久保絃章・佐々木正美・清水康夫監訳 (1998) 自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック—. 東京書籍.)

**A Case of a Young Adult with Autism Spectrum Disorders Who Has Released from Severe Behavior Problems through Visually Supported Communication Training: The Usefulness of the Picture Exchange Communication System (PECS)**

Shinichiro KADO

*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*

Yoko MURAMATSU

*Yokohama Psycho-Developmental Clinic*

Arifumi YUKITA

*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*

Inori NAGAKURA

*Kyoto Prefectural Rakunan Hospital*

Koichiro TANAKA

*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*

Kazushi TANAKA

*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*

Kazuhiro KAMIKADO

*Department of Child Psychiatry, Kyoto City Child Well-being Center*

The philosophy of normalization has been prevailing but so gradually in Japan. From residential services to community services, the trend of social well-being for individuals with developmental disabilities has been shifting. However, the need of residential services for individuals with mental retardation and/or autism spectrum disorders (ASD) is not decreasing still now. In particular, the rate of people who have very difficult behaviors to cope with in residential facilities is even increasing gradually. In the present article, we reported the course of teaching spontaneous communication skills with the Picture Exchange Communication System (PECS) to a young adult with profoundly mental retardation and ASD. The training is ongoing still now, and we are reporting the course from phase I to phase III. Nevertheless, in phase III, it should be emphasized that the behavior problems have drastically decreased. The PECS is very useful program for individuals with ASD and related communication disorders to learn functional and spontaneous communication skills.

Key Words: autism spectrum disorders, severe behavior problems, communication, Picture Exchange Communication System (PECS)

—2007.2.6 受稿, 2007.7.31 受理—